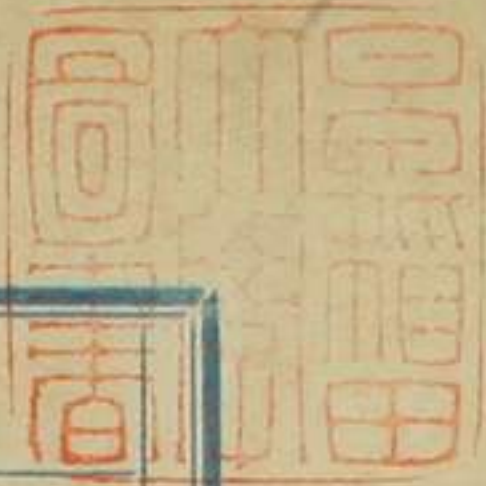


212



紹

詔めされたり美感

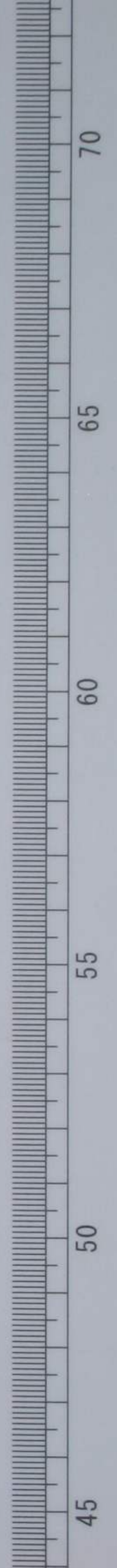
坂本繁二郎

之は主として絵画の上から云ふ迄してある  
 絵画面の美感即ち時間を加味しない見た斗り  
 の美感と云つても其れを區別すれば色々の種  
 々が出て来るだらうがしかし之を調ふは題  
 著するニ差別の區域を加へく一方は只美しいと  
 のみ思つた心と他方は其美しさを認識した  
 心と之である今云ふ心とすゝ詔められた  
 美感は此の力を認識した心の方に亦も縁を

とく

本間文庫  
 文庫 14  
 A 181

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



以つて居るやうである

直接自然の養感の上には必ずや其に不係力  
の意識たるものが附随して居るのは否か事の  
出来ぬ事であるや其れで其れならば前述の  
如き只美しとりや思つた心と力を思つた心と  
の差別を降くさうは出来ぬ筈であるが無論  
其間には確とした境界線の畫す可きものはな  
いだらめ如車と南の如き關係に比較の上に現  
るべく居る 只美しとりや思つた心と  
の心は自己本位の場合に多く現るべく易く例へ

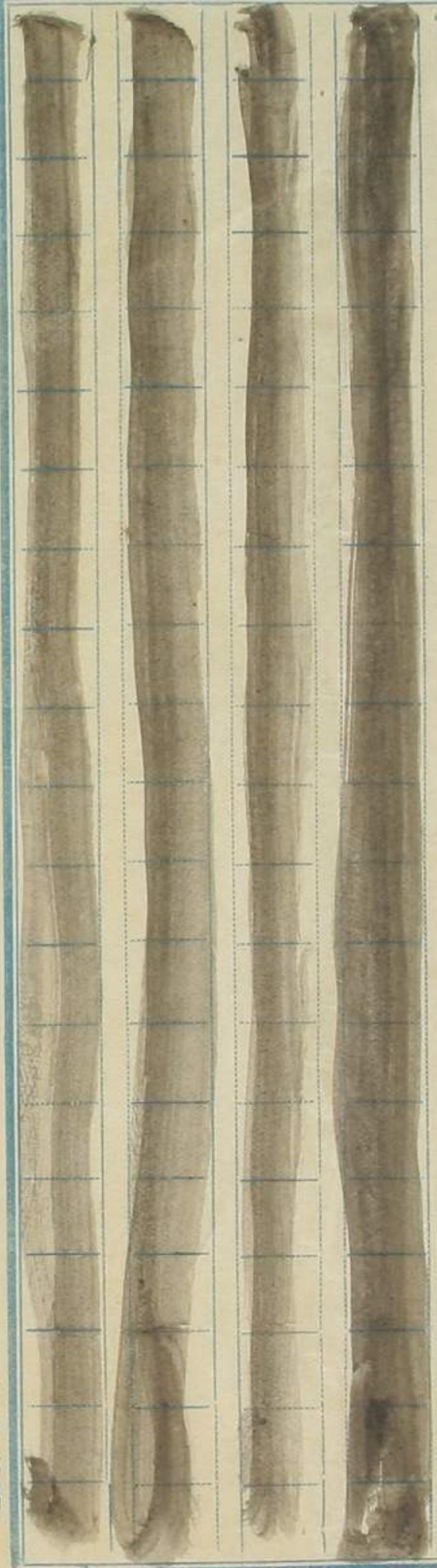
は自分に能く似合つた養物の色合いを弄ぶ折  
の心の様なもので又力を感じた方のものは歎  
賞認識等客観性を帯びた方に多く現るべく、様  
だしかし尚微細に其心を調べて来れば同じ客  
観性と云つても主観的客観性や主観的の客観  
性の其の主観と云ふ程に際限よく進入して居  
るだらうし又主観と云ふ程でも客観的の主  
観を其上の 又客観もあつたらうし主観から出立  
した飛常な決心飛常な動きの進路が飛常な客観  
に一致したる客観の上に現るべく来る我亦ど

の如く主観客観と云ふ事は実は其の体を容易  
に捕捉し難きものなり。側から見てさへ男は女に  
の如く入り組んで居るので本人自身の積りで  
は客観であつても側の眼には大なる主観に見  
へて居たり。是等は普通であらうから此差別は  
嚴密の意味には實に困難であらう。しかし大体より  
差別するときは以上の区別が著明になつて居る  
のであらう。此の力ある美感に繪画のみに限つ  
て居たり。これは無論で茲にのみ引用せしめない  
下あつた。第自然の上に醜悪や味覚よりも一番

# 十

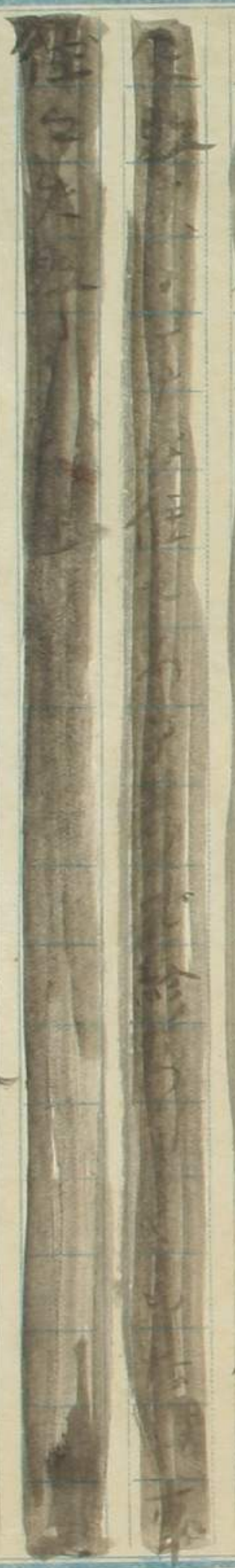
廣く深く常に交錯して居るものは眼界の認識で  
ある。眼界の認識はさうしても繪画と云ふは  
自然を保つて居る。繪画と云ふものは美的造形の約束に限らる。  
間力の美感の如く實在を認識した場合には  
の表現による。感懐は儼然たる画面では其連想  
性を待つて僅かに其影響を伺ふ外には其原感  
情其終りの形と云ふ事は他の形や色彩の如く又  
前述の只の美しさの如き意味に約束する事は  
出来なからぬ。又只に出来なからぬのみならず力

の美感は普通の美感なるものと其悉くが必ずしも正比例を保たずに現るゝ此力の美感は物さへ在れば必ずしもそのものであるから普通の醜感を催すところに此力の方は却つて益々同時に美感を發揮するのである之れを混同して往々作画を失敗する



十ノ番 松屋製

筆を束ねたり曲げたり又只に若草なりのやな、力の美感は普通の美感なるものと必しも正比例を保たずに現るゝ居る此力の美感は物さへ在れば必ずしもそのものであるから普通の醜感を催すとき此力の方は依然として美感を發揮するのである之れを混同して作画を力ある美感は物が在ると認識した心に著く現るゝので物と物の個々相が其れ其れに違つ





て倫を描いたからとして其美感は強人が消失し  
 残るものだけ丸も悪感を催はず抑お画向の妙で  
 おる只の形や色の如く際調や調和の上に現  
 小し美感の如き意味にはどうしても画向に  
 束す事は出来たものである差別ある事は  
 あらゆる物の内容外形の總べてだから硬し  
 の柔しもの彼方の物此方の物等其区域は甚廣  
 大なる方面に在るのである同じ青色の外でも  
 大しでも其色に差別があるが  
 両極端の反應が潜む<sup>その</sup>力<sup>を</sup>發揮さして

居るしかも皆美感である

それと此外に物のあらざる方面に必ず附纏已  
 った居る滑摺感がある。硬し物と柔し物と在る  
 何たる滑摺感ではあるまいか白い物や青い物や  
 茶碗や火鉢等は走ったり黒むんだり蒸く滑摺  
 の極みである物に限らば畳の上に火鉢を置け  
 ば其火鉢が平然として動かぬ事も笑しう事  
 である其平然たる四角の角々が更に滑摺であ  
 る之小等も之をいくらか感じただからとして特に  
 人物の表情でも利用して何かの説明方術を取

つたならば何うか知らぬが静物画を其俟其感  
情の上に立脚して描いたからとて沖も滑稽感  
は現こ木ない餘程近い心同志が特別の文法の  
上に其小等の画面より受け、連想にうけて行  
程かの合得をもちては有り持たないでもたか  
らふしかし強んど去々を注意び之小等も絵に  
さ木ない一面に近いとらつてよからふ  
哲意識と云ふ事は之小をと區別するもの  
はないだらふが無理に名付く小は哲意識とて  
もしふすきものかち知小ない

# 絵文

既に思考に於て成す小た了絵の外にて心も此  
気分に近い意味を手探り込んで居るのは若冲  
だ律小の意識に上つた物と云ふ事の感情は思  
つた程るに達人で居るのを思ひせうする  
強烈なる美感の活字が認められる、けいあ  
るはに美感へと並べ立て、居るが実は美感と  
云ふ事も人に依りて其解釋も内容も大差違つ  
たものであるのだから程るの美感恐ろしい  
美感恐しい美感只何とも知小は涙の出て美感  
芋色々である自右の云ふ美感は只己けなく心

と引入いれる、むけのものである。只其れむけであ  
る其れの場合に依つては其れがあらぬも然し  
くも亦平しくも亦さうおしあし只引入いれら  
るゝとらゝ外説明されぬもので、  
に引入いれらるゝ居ても又しも悔やふ事のな  
位置である善意識が時に悪感を催はし悪感が  
時に善感をなす如く位置の動くものでなりの  
である引入いれらるゝ一程の如く善感も且つて  
りり之外に變化した事かたりののである悪感や  
善感の如くけぢなものではないのである。

# 花

着沖と同じ様に見へて居て案外違つて居るの  
は雪舟である。彼も或る哲意識の上に物を認め  
た分子が感ぜらるゝには感ぜらるゝ、けれども  
個々相認識の上には其れ程強烈ではなからぬ。  
云へる感情とは割合に遠いものである。着沖  
の如く個体と其相関係の力の善感が鳴り響き  
たのとは違つて居る。着沖は一つの花の如くも  
其れと花瓣との関係の神秘さに、教書の眼を注  
いだらふと思ふ雪舟の處には其れを云ふ心持は違  
つて来ない。西洋の画の如くも之に近いものが



自分ありて己のありて己の事の丹には折々これ  
へるのを見たりしかし概して西洋のものには自分  
にしつくりと満足せしむるへなり之れに於ては  
久しい昔から燦爛を以て居る油絵の描法は  
るおが然りと今日では先線とらし物を加味し  
た画面である故に其色に現れて居る物は色  
の間接の感情を透す気分がある所へ其絵が先  
線其後の興味の上になつたものにしろ高物と  
らし事を無視しては成立すべきものではな  
吾人の眼は先線を認むるに相違なし殊に遠

手

早に至つては然りと先線美と云つても  
であるが高且物を無視しては成立しな  
の吾人の眼は先線の間接を認むる事が先  
づ大体に於て高かぬ人心であらふと思ふ日本  
絵の如く深さ廣さは別として畫載に物を描  
たのに何だか一寸一面に於て確かに描くと  
らを描かぬ標本満足があるのは此達の事  
可からず中心の要求に投じたものではあ  
りかと思ふ高西洋物でも油絵でなくペン  
画にはしつくりと来るのが所謂傑作の如き油

繪以上のものがなすので、たゞ単純或は小品の  
ものは作者の感情が自由に吐き出さるゝと云ふ開作も  
無論あつたやうに、凝の舞地が **高其** ハ以外 **に** **支源** と物な  
の事につけて **ある**

か分かるもので、はた昔しからの歴史の中に  
は作品の外に残らぬして其人限り永遠に消滅  
したあたりに居るが、**かど** **小むけ** **あ** **か** **か**  
**ら** **ない**

画面の美感又は空間とあつても、高其指定は確  
かでない、總べての感情や生命の内容は際限不  
く連続して居るので、是を範圍ある事の説明  
が、確固たらずる間に、自分にあつて、**詔** **か** **さ** **小** **な**  
い、美感の事も流るゝ人に合ふの仕、悪い事にあつ  
て居るかも知れぬと思ふし、**自** **分** **は** **之** **ル** **ス**

上に云ふ可き言葉が分らなうで悟辨して  
世見て置く

絵画の連想に依りてのサ僅かに其片影を認  
めらる、此一画の感情は画而て 双 た ない  
極に恐らく言葉や文章の上でも六ヶ分ならずと  
思はる、其小で勢い各個人に其わく現はれ  
たけが現はれたるサで聞かす聞かす其人一生限  
り昔も今も消へ去りつ、あつたのと思はる、  
うである、魚に魚人の口より た 様 に 付 へ ら な な  
いふに勢い世間に經視サ 十 た 様 に 付 へ ら な な  
北感情が割

念いに深く吾人の心を捕へて居ると云ふ事

思ふ

のじある